

電子的な出版流通と高等教育

土屋俊(千葉大学)

HAS研 第27回研究会
2010年 9月 14日(火)
マクセル東京ビル

「電子的な出版流通」概説


• 「電子的な出版流通」概説

– 学術(STM/SSH)

- 「外国雑誌」⇒ ほぼ完全に電子化
- 「国内雑誌(英文)」⇒ 明るい絶望的未来
- 「国内雑誌(和文)」(学会誌・紀要)⇒ OA雑誌へ
- EBooks(英語) ⇒ 目下検討・健闘中
- Ebooks(日本語) ⇒ 将来不透明

– 一般(中身で考えて娯楽・実用書・専門書)

- 英語の新聞・雑誌 ⇒ 痛みを伴いつつ移行中
- 日本語の新聞・雑誌 ⇒ 痛いだけ
- 英語の図書 ⇒ Kindle/Nook/Sony/iPadの世界
- 日本語の図書 ⇒ ちまちましすぎ

- 
1. そもそも、日本の出版は全体としてどうなるのか?
 2. 大学との関係を考えるにあたって、大学の教育はどうなるのか?
 3. どのような形態が望ましいのか? いわゆるICTの役割は?

最悪のシナリオの展開

- 日本の(雑誌・書籍)の出版は、いわゆる「電子」の時代からすでに長期低落傾向にあった ⇒ ほっておいてもいずれだめになる産業?
- 日本において、(これまで雑誌・書籍が本来の任務として担ってきた)情報の流通は電子的に行なわれていない ⇒ この移行がなければ、「電子出版」だって立ち行かない
- したがって、印刷出版は崩壊し、電子出版は誕生しない(日本語出版でそういうことが起こることは、世界の大部分に影響がないので、影響は1億人/70億人に対する程度だが、、、)
- 学術情報の流通はどうせ寄生的なので影響を与え得ないし、、、

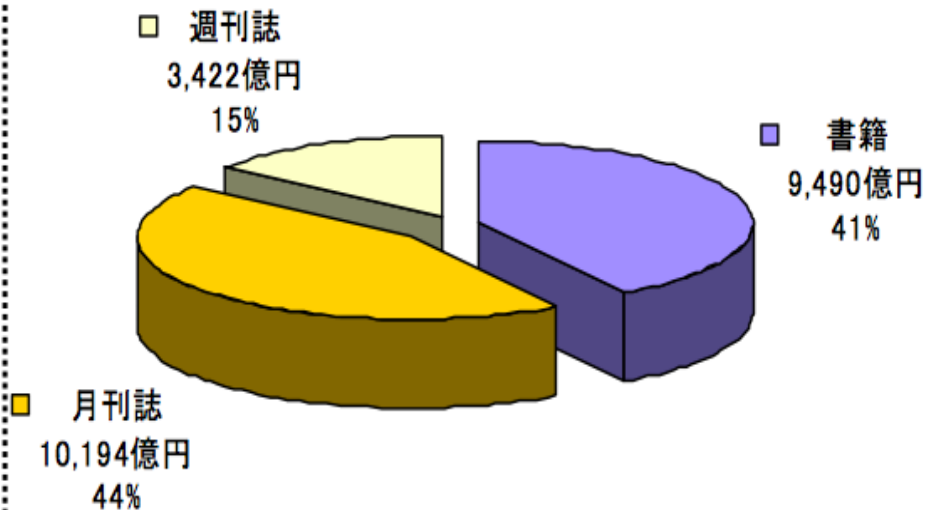
印刷書籍の出版流通

- いわゆる「再販制」+いわゆる「委託販売制」
 - ⇒ 小売店レベルで消費者相手の価格政策がとれない
 - ⇒ 出版社は、出版しつづけるかぎり、出版できる(ある種の金融機能)
- さらに、雑誌のビジネス・モデルにおいては広告が本質的
 - 雑誌購読者のグループは、特定の消費嗜好をもつ(ただし、このグループが十分大きくないと雑誌はもたない。ボーダーラインにあったのが「好事家」雑誌)
- この結果、「広告を載せた雑誌」の流通が印刷物流通の経済的基礎を作ってきた
- もちろん、こういうモデルは市場の硬直化とイノベーションの欠如が生じやすいし、実際生じた
- そして、これらは、「電子」の話以前のこと

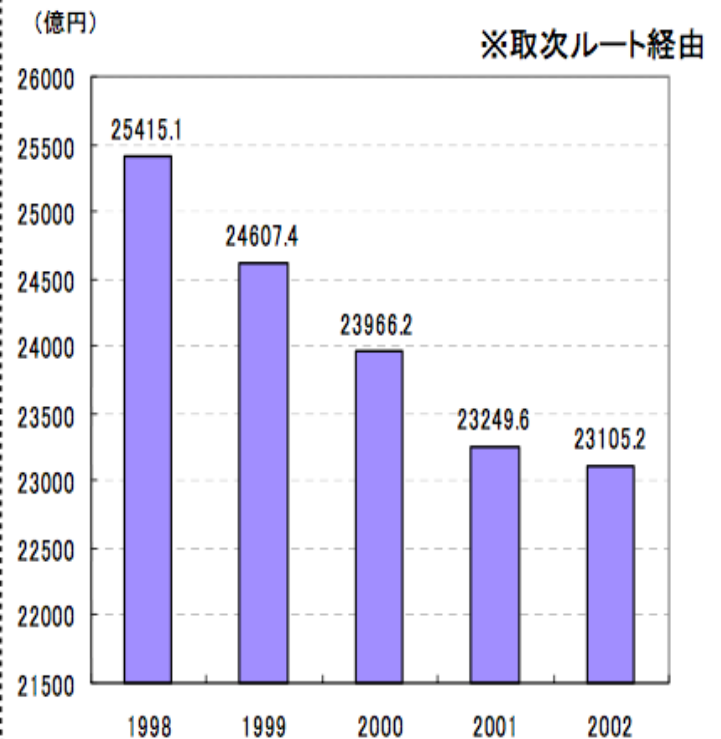
経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課 (2003年7月) “出版産業の現状と課題”を引用すると

2002年出版総販売額2兆3,105億円

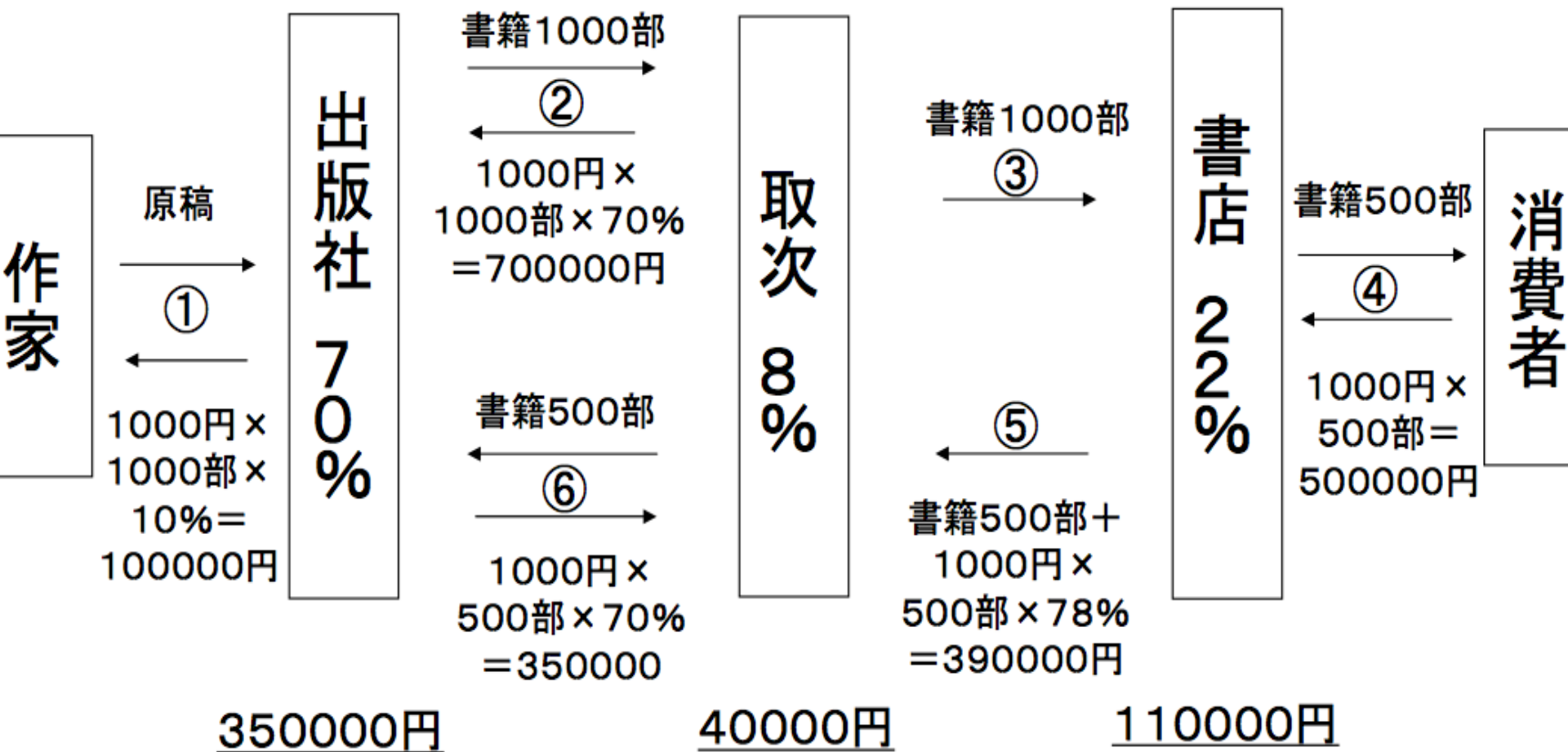
(2002年出版販売額内訳)



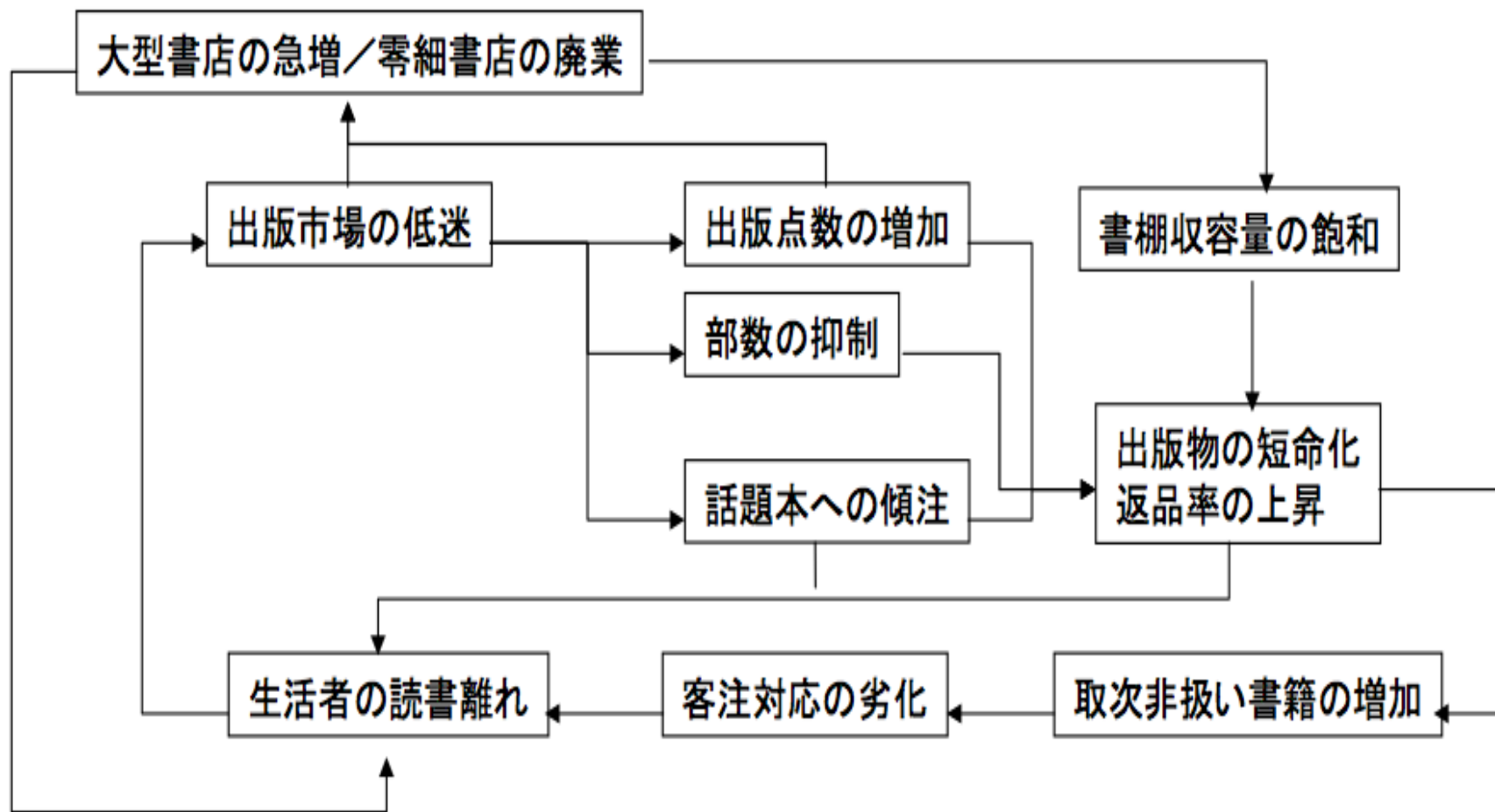
(出版販売額の推移)



(例) 単価1000円の書籍を1000部出版し、500部売れた場合の資金の流れ
 (出版社:取次:書店の取り分=70:8:22の場合)



(現在の出版不況下の“負”のスパイラル)



経済産業省の分析

- 消費需要低迷、少子高齢化による潜在的読者減少
- 読書離れ、万引問題
- 書籍購入費減少(インターネット、携帯電話による通信費用の増加、情報摂取方法の多様化)
- 蔵書欲の減退(読書スタイルの変化)
- 新古書店、マンガ喫茶などの二次流通市場の出現
- 図書館における新刊本の購入・閲覧利用の増加

「紙の本がなくなる」という話は全然ない」

媒体別広告費の推移

(09年総額6兆弱、マス媒体3兆弱、前年比11.5%減)

年	新聞	雑誌	ラジオ	テレビ	インターネット
2000年	12,474	4,369	2,071	20,793	590
2001年	12,027	4,180	1,998	20,681	735
2002年	10,707	4,051	1,837	19,351	845
2003年	10,500	4,035	1,807	19,480	1,183
2004年	10,559	3,970	1,795	20,436	1,814
2005年	10,377	4,842	1,778	20,411	3,777
2006年	9,986	4,777	1,744	20,161	4,826
2007年	9,462	4,585	1,671	19,981	6,003
2008年	8,276	4,078	1,549	19,092	6,983
2009年	6,739	3,034	1,370	17,139	7,069

(億円、電通調べ。小田光雄氏ブログから転載)

雑誌・書籍販売金額

(出版科学研究所推定)

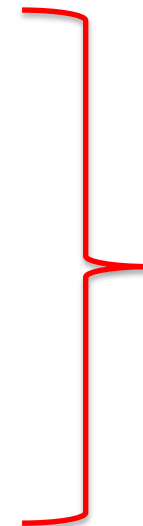
年月	推定販売金額 (百万円)	前年同月比 (%)	年月	推定販売金額 (百万円)	前年同月比 (%)
2009年1月	139,563	▲1.3	2010年1月	130,440	▲6.5
2009年2月	181,769	▲4.7	2010年2月	176,931	▲2.7
2009年3月	220,396	▲5.2	2010年3月	217,791	▲1.2
2009年4月	158,173	▲5.4	2010年4月	161,803	+2.3
2009年5月	133,188	▲7.5	2010年5月	126,226	▲5.2
2009年6月	155,588	+0.7	2010年6月	147,388	▲5.3

(小田光雄氏ブログから転載)

出版社数の推移

年	出版社数	増減数	年	出版社数	増減数
1980	4,269	-	1995	4,561	+ 74
1981	4,154	▲ 115	1996	4,602	+ 41
1982	4,327	+ 173	1997	4,612	+ 10
1983	4,231	▲ 96	1998	4,454	▲ 158
1984	4,169	▲ 62	1999	4,406	▲ 48
1985	4,183	+ 14	2000	4,391	▲ 15
1986	4,258	+ 75	2001	4,424	+ 33
1987	4,258	+ 0	2002	4,361	▲ 63
1988	4,282	+ 24	2003	4,311	▲ 50
1989	4,282	+ 0	2004	4,260	▲ 51
1990	4,309	+ 27	2005	4,229	▲ 31
1991	4,320	+ 11	2006	4,107	▲ 122
1992	4,284	▲ 36	2007	4,055	▲ 52
1993	4,324	+ 40	2008	3,979	▲ 76
1994	4,487	+ 163	2009	3,902	▲ 77

減りはじめる

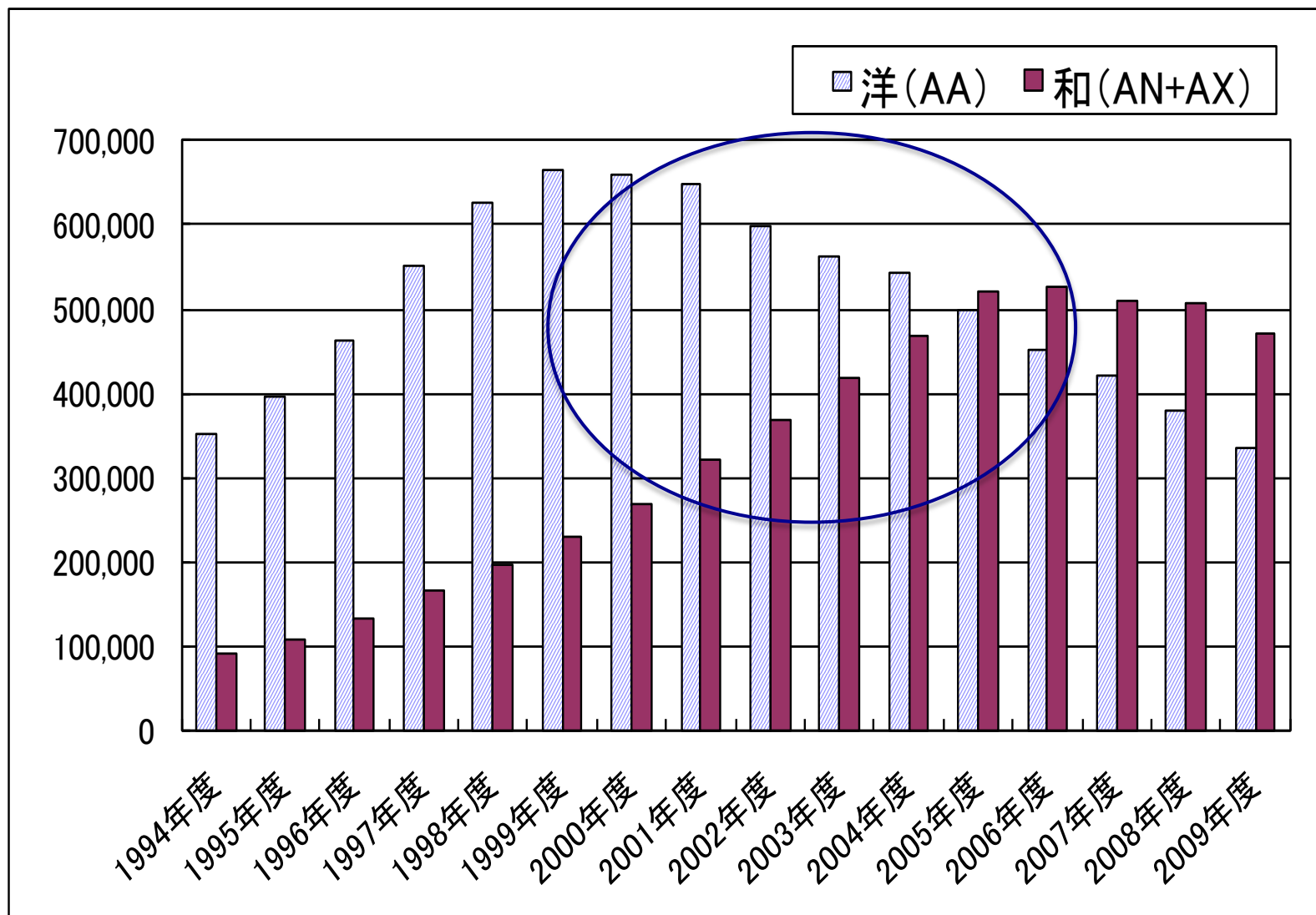


一貫して漸減

(小田光雄氏ブログから転載)

学術文献の流通も大いに問題(NACISIS-ILL統計)

電子化進行の時代に和雑誌掲載論文の複写依頼が増える!?



Elsevierタイトルの依頼数の減少

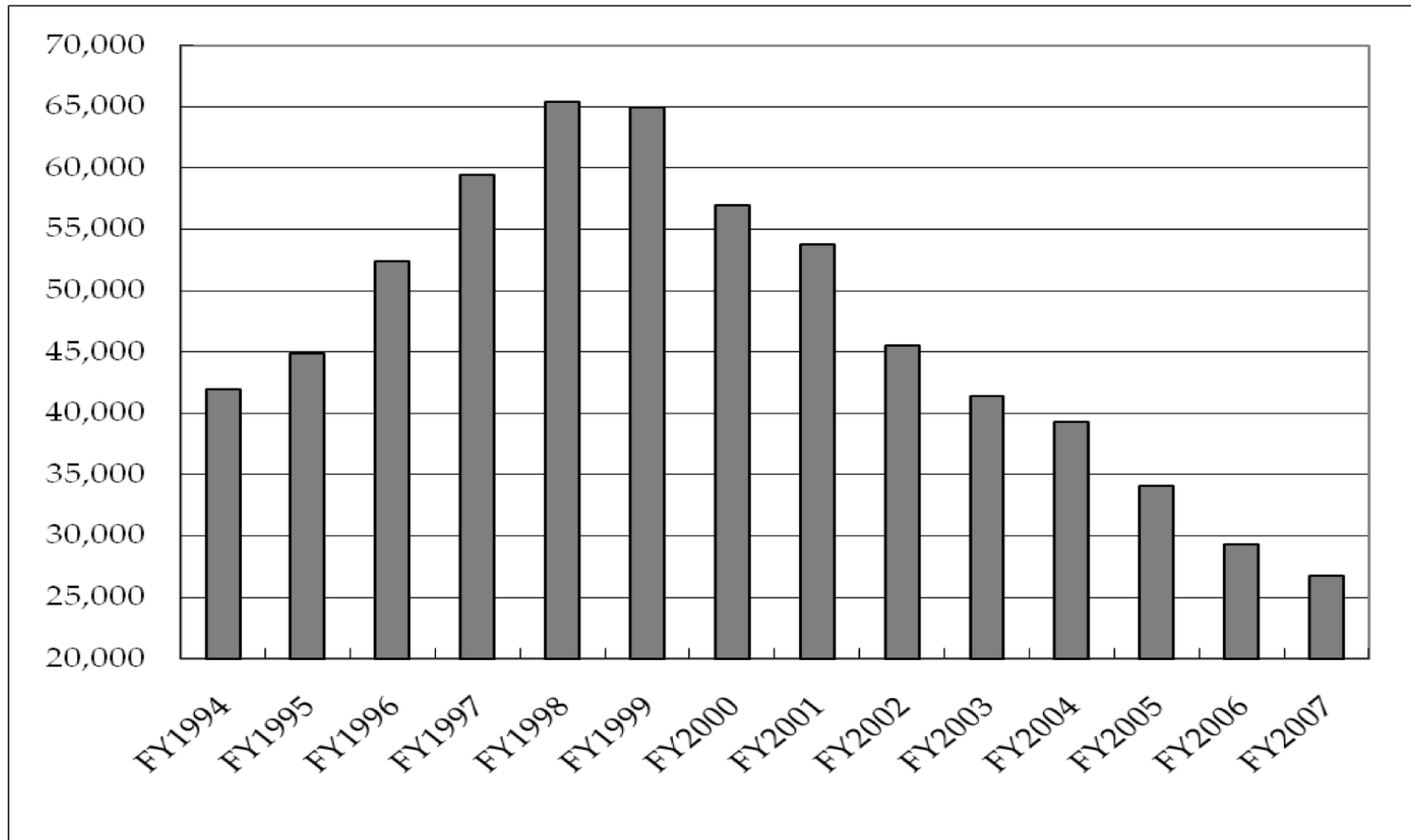


Figure 5. Change in Number of Filled Requests to Elsevier's 149 Journal Titles.

CiNii契約形態別の減少パターン

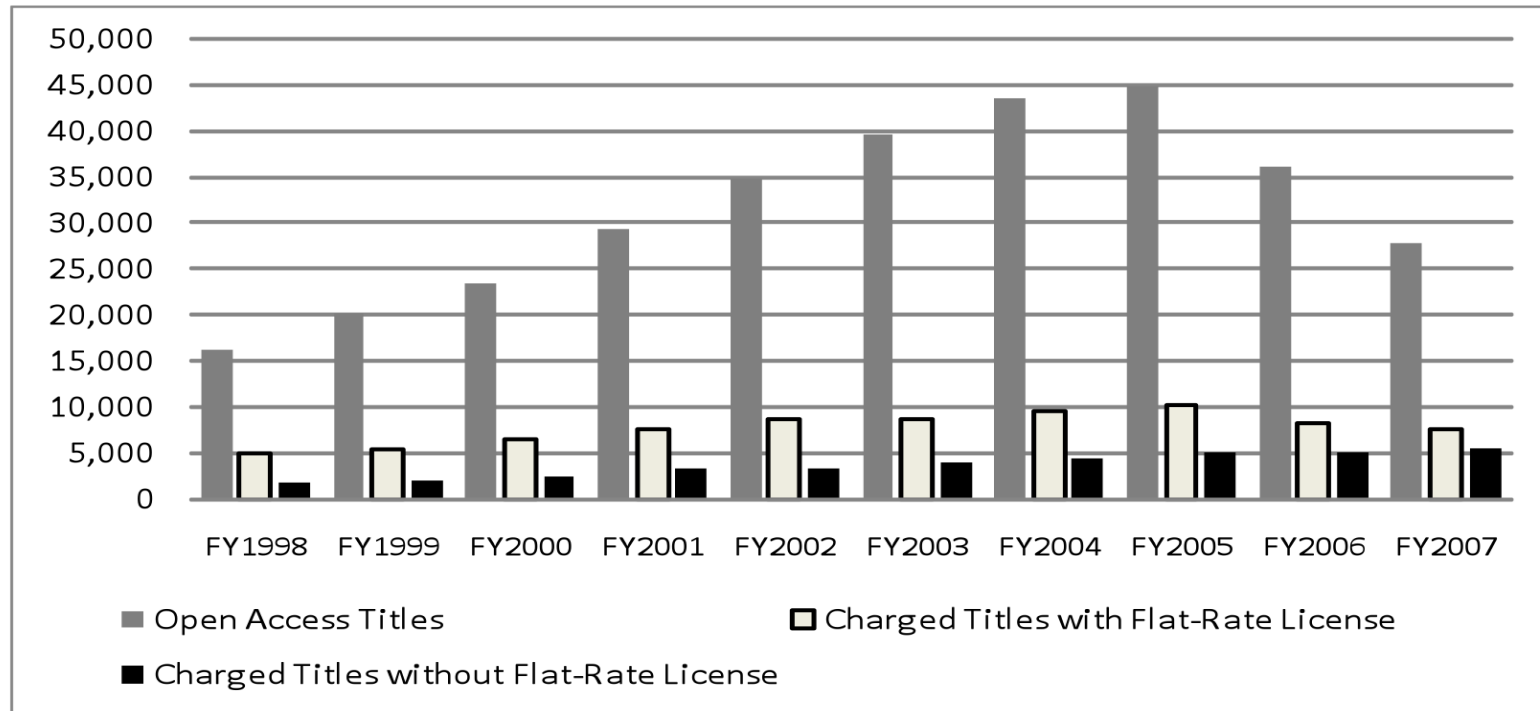


Figure 7. Change in Number of Filled Requests to Titles in “CiNii” by Category for Burden of Expense.

Note : It should be noted that the reason why the photocopy of articles in open access titles are still requested. The digitization of back issues of these journals is not completed or current issues of these journals published within a few years are being embargoed.

この時期に増えたのは看護系

- 看護系雑誌の刊行主体は、看護師を主たる会員とする「XX看護協会」
- 会員規模は数万人。会費収入数億円
出版事業の規模は数百万
(人文系学会だと、会員1000人会費1万円で総予算1千万)
- しかし、会員内のみで流通(会員から文句はでない)
- 一方、各県に看護系大学、学部、学科増設の時期
- 学会誌は在庫がない ⇒ 図書館で買えない ⇒ 学生が必要としても自分のところがない(医学図書館では、看護は弱い?)
- 現代日本社会で必要な情報の円滑な流通を妨げる(一般書籍とは異なる)既存の印刷物流通体制

電子的流通のビジネス・モデル

- 日本の出版社(新聞社を含む)は、「同時利用ユーザ数」プライシングが大好き
 - どう考えても時代遅れ(接続ポートの数?)
 - 頒布コストが(おそらく)逡減することを無視
 - 要するに、「利用させまじ」というモデル
 - (もちろん、NetLibraryというのも海外にあるが)
 - 意味のわからない「著作権」議論(出版は複製だが、、、消費需要低迷、少子高齢化による潜在的読者減少のほか、・読書離れ、万引問題、・書籍購入費減少(インターネット、携帯電話による通信費用の増加、情報撮取方法の多様化)・蔵書欲の減退(読書スタイルの変化)・新古書店、マンガ喫茶などの二次流通市場の出現・図書館における新刊本の購入・閲覧利用の増加)
- 学術雑誌については、「儲かる」モデルが成立(日本を除く)
 - みんな嫌いだが、儲ける可能性のない産業にはだれも参入しない
 - 「過去分」については、一回支払いやオープンアクセスも
- Ebookについては、模索中

日本の「電子化」は印刷媒体の自明の存続に無邪気に依存してきた

- 1990年代の諸「電子図書館」プロジェクト
 - たとえば、奈良先端科学技術大学院大学のパイロットプロジェクト(いまは目立たないが、膨大なイメージデータが眠っているはず)
- 1990年代後半のNACSISにおけるELS、のちのNIIのCiNii?
 - 学術雑誌のページイメージの保存・提供プロジェクト
- 最近の国立国会図書館の所蔵資料のデジタル化プロジェクト
- (多分)電子辞書もかなりそれに近い(イメージではないが)
- Google Booksも?

というわけで、多分、

- 大量生産・大量消費モデル=資本主義モデルによる印刷書籍出版はなくなるだろう
 - そういう意味では、紙の本はなくなる。すでになくなりつつある：もろもろの目録類、地図、電話帳、官報(検索)、案内もの、、、
 - とりわけ、とっておく価値のある(学術的な)本は出なくなる(流通の基盤が崩壊するから)
 - オンデマンド印刷?
 - しかし、資本主義モデルは期せずして、(ある程度)品質保証システムでもあったので、そのあたりはどうなるか(学術ではピアレビューという仕組みが保証することになっている)
- 媒体の種類は増えるだろう
 - したがって、紙の本はなくなる。しかし、それはどうでもよいこと
- しかし、紙の本の運命はどうでもよい。電子的流通が使えるもの(ビジネスモデル)になるかどうかのほうが大事
- そして、それに関しては、きわめて悲観的
- 起死回生の作戦としては、「**情報鎖国+印刷文化動態保存**」かな? でも、それも無理そうだけど、、、

(日本の)大学教育はどう変わるのか

背景

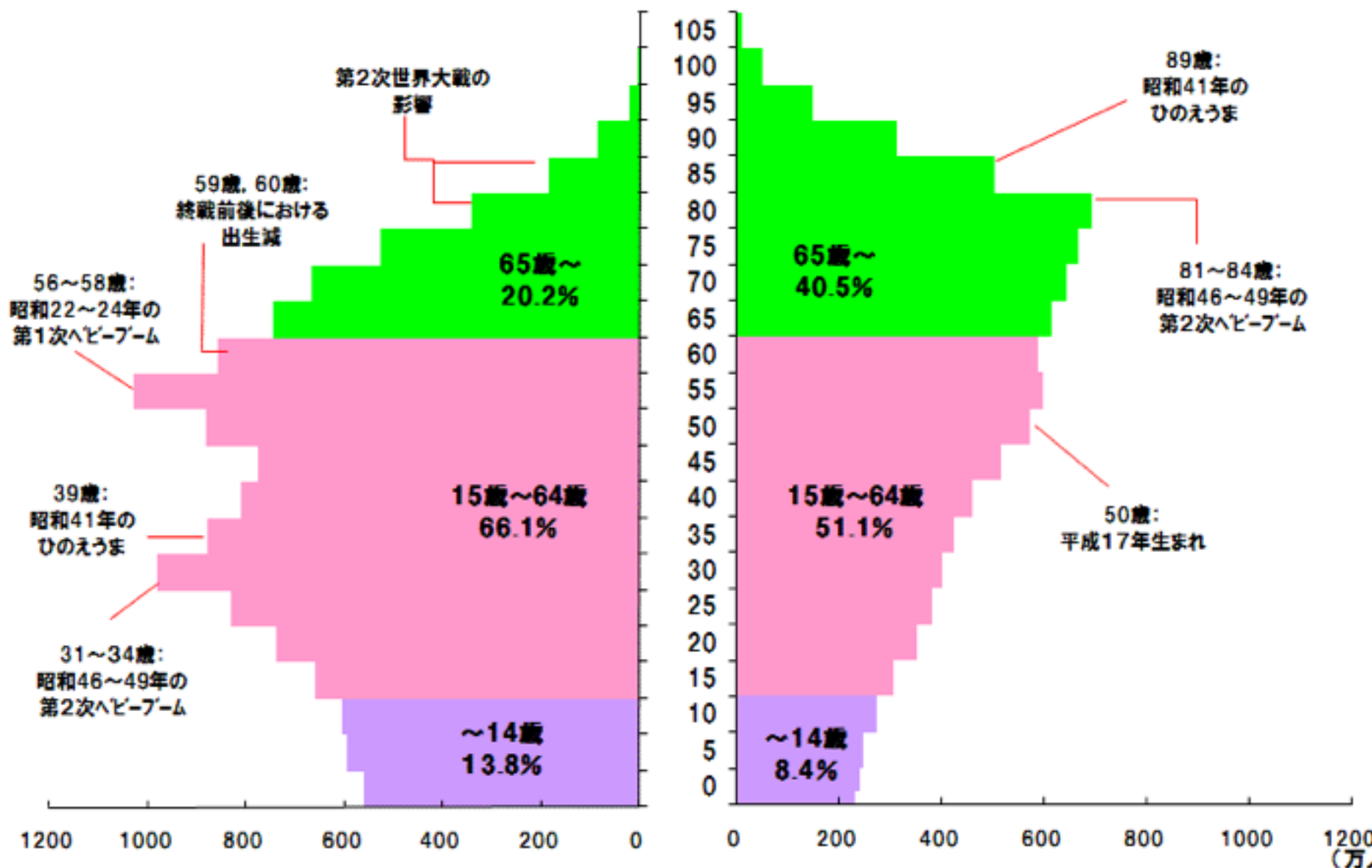
- 社会的デマンドの急激な顕在化⇒長期的人材養成・基礎学術振興ではもたない
 - 教育成果の目に見える成果と研究の産業への直接貢献へプレッシャー(善悪べつ)
 - 4兆円産業へのリターンの要求(運営費交付金+授業料+私学助成+競争的資金+ α)
- 少子化の影響はどう出るのか
 - 今の8歳人口は、はるかに100万人以下
 - ⇒ **全入時代**。しかしそれでも学生が足りない
- 国際化
 - グローバルなマーケットにおける競争⇒**近代化・開発途上モデルの終焉**
 - 教育の英語化とアジア人留学生の増加
 - 「質保証」問題(国際的學生流動性への対応の前提条件)
- 入学者選抜
 - すでに「入試」は学力保証としてあまり機能してない
 - 半分以上が、学力試験なしで入学
 - 高大接続(どこへいっちゃったの?)
 - 全入時代において変質する「入試」⇒「人生における成功を保証する大学への志願」と「競争選抜」との予定調和から「社会の要請」に応える「(学生集団の)構築」へ
- (高度)職業訓練としての大学教育の変質
 - 昨今の「就業力」ブーム
 - 職業直結学部(教育学部から医学部まで)と資格試験との関係
 - いわゆる「リベラル・アーツ」の位置づけ

人口120年の変化はこちら ([1930~2050年人口ピラミッドの転換過程](#)) をご覧下さい。

平成17(2005)年 12,777万人

(歳)

平成67(2055)年 8,993万人



(日本の)大学教育はどう変わるのか

中身(悲観論は別として)

- 学生のライフスタイル
 - いわゆるGen Z, digital native etc
 - なぜか勉強熱心。授業へ来るだけ?
 - 就業意欲・進学意欲と将来の幸福
- 教員のライフスタイル
 - 研究者が教員であることの意味(営利大学の可能性)
 - すぐにdigital nativeが
- 学生が自分で勉強する、させる時代へ
 - 教科書の変貌 ⇒ 教科書を「完璧に飲み込めばよい」時代の終わり
 - 利用可能な情報資源の重要性 ⇒ 出版が残ってもらわないと困る(もちろん、電子出版でよい)

まずは、図書館を考えると、

- 主要な学術情報流通の電子化の趨勢は行くところまで行く
- 教科書などの日本語図書(一般図書)の印刷出版は続くかもしれないが、国会図書館には電子媒体資料が存在
- したがって、(この一部を除いて)大学図書館の一次資料提供機能は不要となる(ナビゲーションはツールを買えばよい) ⇒ 80年答申構想の終焉
 - それでも残る自館未所蔵所蔵資料の相互便宜供与は、外部業者とか、OPAC連携検索とか
- あとは、機関リポジトリによる研究(eScience)支援しかない⇒しかし、それは「図書館」？誰が図書館員をやるの？
- そもそも、知識評価の形態が変わる：ストック⇒フロー

Uvaの実験(2001)

- 図書館のEtext Centerで実施
- TEI から MicrosoftReaderに変換したテキストを搭載したPDA配布
- テッキーな宗教学者が教える宗教学のクラス(学部)とテッキーでない英文学者が教える英文学のクラス(大学院)
- どちらもtext-heavy syllabusで、レアもの資料
⇒(定量的な結果は出なかったが)原典を直接に確認できた授業に学生の学習意欲は増したと考えられる(small screen, searchabilityなどの問題)

大学出版会の変貌?

- 「つぶれ」つつあるアメリカの大学出版会
 - 非営利・教科書・(人文社会中心の)モノグラフ
 - 大学の目的がUPの利益を生む好循環の崩壊
 - Rice,
 - 原因は、大学が必要としなくなったから
 - つぶしたくないときは、大学図書館の傘下に⇒**無料アクセスのためのモデル**
 - Michigan, Utah,
 - 日本ではお互いに無理
- いずれによせ、モノグラフはdigitalしか無理の時代
 - プラットフォームの共有
 - (日本の場合とくに)サイトライセンスの可能性⇒**有料アクセスのためのモデル**

LMSとの関係

- おそらく、これから日本でも急速に普及
 - Moodleでよいのかは別にして
 - しかし、まだおおむね授業資料配布プラットフォームでしかない
 - ライセンスされる情報資源のとりこみ
 - インタラクティブな要素の意義
- 資料・資源的側面=図書館との連携
 - 図書館とITとのカルチャ問題(古くて新しい)
 - しかしやらねば

考えられる制約(Joshua Kimより)

- 権利処理
- 柔軟なプラットフォーム
 - Kindle/iPad/PC/なんでも
- 柔軟な価格モデル
 - 個人課金・機関課金、パッケージ・タイトル等々
- 既存資料との統合
 - 図書館との関係
- 網羅性
 - (ちょっと矛盾するが)あまりカリキュラムに依存しない
- その他
 - 書き込み? App? コンテンツの部分利用?コミュニティ系?